

第35回少年の主張全国大会

山田中・中村奈緒さんが奨励賞



中村奈緒さん

本年度の「わたしの主張」岩手県大会で最優秀賞に輝いた中村奈緒さん（山田中3年）が、第35回少年の主張全国大会において見事、奨励賞に選ばれました。中村さんは、11月10日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された同大会に、東北ブロック代表2人のうちの1人として出場し、全国の場で堂々と主張をしました。ここでは、中村さんの主張『「当たり前」の中に生きる』の全文を紹介します。

あの日、いつも通り「行ってきた」と言って小学校へ行くために家を出ました。まさか、もう二度と、この家に帰って来れなくなるなんて思ってもいませんでした。

午後2時46分。

小学6年生だった私達は、1週間後に控えた卒業式の練習を教室で行っていました。地鳴りとともにやってきた地震を今でも鮮明に覚えています。校舎が壊れそうな勢い、みんなの泣き叫ぶ声がありました。長い長い揺れがおさまり、校舎を出て校庭に避難すると、地域からも避難してきた人たちが集まってきました。揺れているのか揺れていないのか自分でも分からない、生きていく心地がし

ませんでした。

「ゴォォ」と鳥肌が立つ気味の悪い音がしました。間もなく「ドォォン」という音と共に、大きな津波が防波堤を乗り越え、国道が海と化しているのが見えました。校庭は危険かもしれないと、校庭より高い位置にある池の周りに集まりました。

そんな時、母の姿が見えました。母は無事でした。

しかし私の家族はバラバラでした。父は漁師でその時、沖にいました。姉は中学校からバスで帰ってくる時間です。祖母は秋田に旅行に行っていたので無事であるか確かめようがありません。一体何を考えたらいいのかわかりませんでした。

「私だけじゃない。みんな同じ気持ちなんだ。大丈夫、大丈夫……」

何が起きているのか理解できない現実を、何とか受け止めようと何度もつぶやきました。

あの日を境にして、私達の生活は一変しました。

幸い、私の家族は無事でしたが、今までの「当たり前」が当たり前ではなくなりました。当たり前のように暮らしていた家も、当たり前のように積み重ねてきた思い出も一瞬にしてなくなりました。何気ない「当たり前前」がどれほど大切で、どんなにかけがえないものだったのか、私だけではなくたくさんの人が感じたことでしょう。

震災を経験し、私の中で変わった「当たり前」に対する思い。今、気になっているのは学

「当たり前」の 中に生きる

校生活の中の「当たり前」です。

私の学校では、普通ではありえないことが「当たり前」になっています。牛乳パックをリサイクルせず、平気でゴミ箱に捨てる人。ひどい時には外に投げ捨てられています。他にも、2階の教室から物が投げ捨てられたり、校舎が壊されたりということが何度か起きています。誰がやったのか；正直に名乗り出る人はいません。注意しても無駄だと、そのような行為を「当たり前」に受け流している空気を

感じます。そんなことが起きるたびに、悲しいないつも思います。牛乳を飲むこと、学校に来られること、そんな当たり前前がたさを忘れてしまっているのです。

私はこんな不当な「当たり前」を何とかして変えたいと思っています。私一人の力は小さいけれど、小さな勇気を出して声を上げることで、後に誰かが続いてくれるかもしれません。私は生徒会執行部の一員として、現在、校舎を大切にすることを展開しています。

大切にしなければならぬ「当たり前」と、改善していかねければならぬ「当たり前」。山田に住んでいる私たちなら、「当たり前」がどんなに大切なものかわかるはずですよ。

あなたの周りにも、忘れかけている大切な当たり前はありますか？ また、身近に不当な当たり前はありますか？ 見落としていた大事な何かがあるかも知れません。

「当たり前」を見直し、「当たり前」を高める。私達人間にとって、かけがえない作業を、私は、これからも続けていこうと思っています。

《原文ママ》